

目次

歴史	一
特色	二六
鍛錬	三三
研磨	四一
用語解説	五三
鑑定	七五
取扱と保存	一〇四
國寶の刀劍	一一八
名物	一五〇
参考書	一七六
正宗抹殺論に就て	一八八

村正は妖刀か……………	101
軍刀の選び方……………	109
武將と名刀……………	119

研 磨

刀劍の研磨には、切味を良くする爲と、美觀を加へる爲との二つの目的がある。而して前者に屬するものは洋の東西時代の新古を問はず、刀劍の存在するところには必ず伴ふのであるが、後者は日本刀に伴つて我が國獨歩の發達を遂げたものである。平安朝中期には已に研磨の見るべきものがあつたことは、菅原文時の劍銘と題する詩に「陽文陰纒、刃新發_レ硯、光倒_三桂月_一、氣通_三華星_一、霜雪奪_レ冷、鬼神畏_レ靈、裝_レ金飭_レ玉、藏_レ匱勒_レ銘」(本朝文粹)とあるにも窺はれるが、更に延喜式に作刀と研磨の工程を記して「打_レ坏_{ナラ}一日、破_レ乘_{ハガネ}合_レ乘并打刃二日、剪并錯一日、鹿砥磨一日、燒并中磨一日、精磨一日、瑩一日」云々とあつて、恰も現代の儘を思はせる研磨の段階を示してゐることが注目される。理論的に考へても、刀工が刃文を美しく焼く時代にはこれを觀賞するに足る研磨がない筈がなく、研磨の發達が刀工の刃文に對する注意を綿密ならしめたとも考へられよう。日本刀の黄金時代

たる鎌倉時代には研磨も愈々發達したことは想像に難くない。後鳥羽天皇が番鍛冶を置かせられた時に研師として國弘・爲吉（一本爲貞）なるものを召されてゐるが、古今銘盡所載の番鍛冶之次第には劔國弘、劔清爲貞と區別されてゐることが注目される。因に古今銘盡は刀劔版本中の良書で、内容は原本室町時代と思はれる記録が多い。

建保二年の東北院の職人歌合は著名であるが、當時集つた職人共の中には鍛冶と刀磨があつて夫々が次の如くに和歌を詠じてゐるのも一興である。（羣書類從）

題、月

月にねぬ宿とや人の思ふ覽みいつもたえせぬあひつちのをと

鍛冶

我宿の砥水にやとる月影のあやしやかにさびてみゆらん

刀磨

題、戀

わが戀はなまし刀のかねあまみ思ひきれどもきられさりけり

鍛冶

君ゆへにきもゝ心もときはてゝ我身計りそきえなかりける

刀磨

後世、尾張に在つて織田信長に仕へ、研磨と目利を以て寵せられたものに木屋こと澤田久元沙彌常湛なるものがあつたが、これが遠祖は前述後鳥羽天皇に奉仕した研師國弘で、

代々家業を繼いで彼に至つたと云ふ。常湛は臣節を知るものの如く、信長の歿後は隠居して豊臣秀吉の聘を卻けたと傳へる。其の子庄左衛門常長は徳川家康に仕へて初めは江戸に居り、後に秀忠に従つて上洛してその儘京都に留り、其の子常與と八郎兵衛と二人を隔年交替に江戸に下して幕府に仕へしめ、爾來二子の子孫が此の例を繼承して幕末に至つた。而して江戸時代に同じく研磨と鑑定を以て幕府に仕へ、殊に後者に於て唯一の公認鑑定所として斯界に君臨した本阿彌があつたが、研磨に於ては或は木屋が重んぜられたものの如く、江戸城内の名刀、日光・久能兩東照宮の寶刀の手入研磨には木屋が奉仕してゐる記録が多い。本阿彌の歴史に就ては、同家の宗家門流が今に存續してゐることであるから、委しくは自ら語るべき筋があらう。然るに木屋の子孫は維新後の消息が杳として絶えてゐる。本阿彌流の研磨に對する木屋流もあつたであらう。惜しむべきである。

次に現在の研磨の方法を紹介しよう。これは先年故人となつた近世の名人平井千葉から親しく聞いた覺えである。

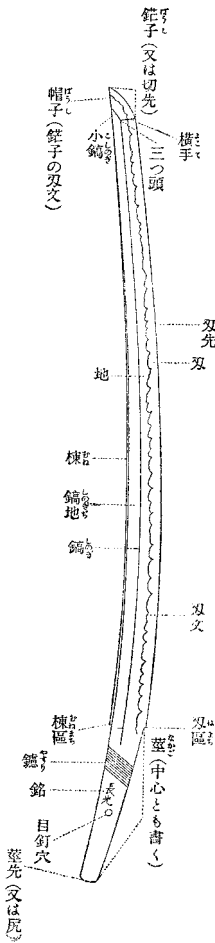
研 前項で述べたやうに、鍛上げた刀は、刀工が鍛冶押にするだけで、その後の研磨は研師の仕事である。荒身の刀に對して、研師は最初に荒研でねたばを合せるものである。ねた

ばを合せるとは刃を附けること、荒研とは荒い目の砥石で研ぐことで、古くは笹口砥・海上砥等の石を用ひたが、近年は此等の良い砥石が乏しくなつたので殆んど人工の金剛砂砥を用ひてゐる。荒研の時には刀を筋違に石に當てて、裏の元から先まで、次に表に返して、先から元まで研ぐ。次に大村砥で棟・鎬・地・刃の順序に研ぐ。この時も刀を石に筋違に當て、各部を裏の元から先に、そして表の先から元に返すのが約束で、これは此の後の石に當てる場合も同様である。但し大村砥では銚子と地は研がずに置くこと、ねたばを合せた後の刃肉をよくならすことを忘れてはならぬ。次に伊豫砥で、大體大村砥の時と同様の順序に研ぐが、多少異なるのは、鎬地を研いだ後に地と刃を一しよに切きに研ぐこと、その後銚子を切に研ぐことで、時には銚子だけに大村砥から用ひることもある。この伊豫砥では肉置を斑まだらなく整へること、平肉を附けて所謂蛤刃にし、銚子の平肉も落さぬやうに心得ねばならぬ。次に伊豫砥よりも細かい改正砥で前と同様の順序に各部を研ぐが、銚子だけは殆ど切である。次に一段と細かい名倉砥で、まづ前と同様に研いで改正砥の砥目を除き、更に銚子は残してその他を縦に研ぐのであるが、そのことをその動作からして「縦を突く」と稱し、一突三寸位づつ刻んで行く。この改正砥と名倉砥で亂刃の刀を研ぐ時には、

用語解説

用語を圖解することとする。次の鑑定の項を読む前に必ずこの項に於て用語をよく會得され度い。

1 各部の名稱



2 形體に關するもの

1 太刀・刀・脇指・短刀

太刀たち（大刀・横刀） 長さが概ね二尺以上で、元來刃を下に向けて腰に佩くべく作られたもので、銘は其の際の外側にあるのが原則である。



打刀うちがたな 長さ概ね二尺以上で、太刀とは反対に刃を上向にして腰に指すもの、銘は外側である。従つて太刀と打刀の銘は相反する側にある。打刀を刀とも又俗に太刀と打刀とを合せて刀とも云ふ。



脇指わきさし 打刀と同様で長さ二尺以下一尺以上のものを云ふ。打刀に脇指を添へて指すことが室町時代以來流行したのであつて、揃へて大小と呼ぶ。



短刀たんどう（小刀・刀・腰刀かたな） 長さ一尺以下のものを江戸時代以降短刀と云ひ、それ以前には多く「カタナ」或は腰刀と云ふ。

II 造つくり

平造ひらつくり



切刃造きりはつくり



片切刃造かたきりはつくり

片面ばかりが切刃造のもの云ふ。



鋒兩刃造きつさきしろはつくり

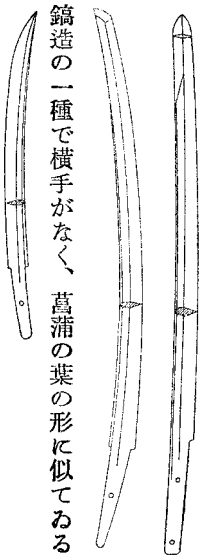
天國作と傳ふる平家重代小烏丸がこの造であるので小烏造とも呼ぶ。正倉

院御物にあつて、東大寺獻物帳に鋒兩刃の語を用ひてゐる。後世社寺の奉納刀に此の形を模したものを往々に見る。

鎬造しのぎつく

葛蒲造しやらぶつく

鎬造の一種で横手がなく、葛蒲の葉の形に似てゐるのでかく名づける。



冠落造・鶺首造かむりおとしつくり うのくびつくり

鎬地の先の側肉を落してゐるもので、鋒兩刃の類と見るべく、主として短刀の場合に限りてかく呼ぶ。甲乙の二様があつて、正格には甲が冠落、乙を鶺首造と呼ぶべきであるが、両者が兩様に混稱されてゐる場合がある。

甲

乙

